
白い黒と黒い白

道化童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い黒と黒い白

【Nコード】

N3589BA

【作者名】

道化童子

【あらすじ】

ナスカは白魔法科に所属し、水魔法を専攻する学生ではあるが、実は黒魔法である火の魔法が得意だった。一方、黒魔法科に所属し、火魔法を専攻するも、実は白魔法である水魔法が得意な少女シェリンと補講教室で出会う事になった。第二回このライトノベルがすごい大賞落選作品を改修した作品。Pixivにも投稿。

第一節

「結局どこなんだよ、教室……」

廊下を歩きながらぼやく少年。

「『西館二階の三番目の教室』ってどれだよ、どこからだよ……曖昧すぎるんだよ」

悪態をつく彼が向かうのは、最終補習の教室。

彼はこの学園の一年生で、ナスカという名前だ。

ここに来てほぼ一年となる。

つまり一年生の終わりを迎えたわけだが、彼の一年生は、まだ終わりを迎えられはしなかった。

劣等生の彼は、学年末のテストで不合格となったのだ。

そして、再テスト、再々テスト、再々々テストを次々と落第し、最終的にこの最終補習を受ける事になったのだ。

「しかし、最終補習って何やるんだ。黒魔法科の連中と合同って聞いたけど、自習か？」

教室を一つ一つ探して回る放課後。

やる気も何もなかった。

ここは剣と魔法の世界。

大陸の西を領土とする、発展した文化を持つカドメ王国は、勇敢な騎士団で有名な国だ。

そして更に、高度な魔法研究が盛んであることでも有名である。

この国には白魔法と黒魔法を共同で研究する魔法研究施設がある。仲の悪い白魔法と黒魔法をまとめただけでも凄い事だが、更にここにはその研究成果を学ぶ下部組織、カードウ魔法学園があるのだ。ここでは魔法の素質ある若者たちが、その素質を伸ばすための教育を受けている。

学園はいくつかの学科に分かれているのだが、大きな学科で言えば白魔法科と黒魔法科の学生が大半となる。

この二つの違いはと言えば、実際は使う元素が違う程度だが、長い歴史が多いなる分断を作ってしまった。

白魔術は、教会を発祥とし、元々は人々を癒し、魔を祓うために作られ、教会で研究されてきた魔法で、光や水、土の元素を用いる。黒魔術は純粹な兵力として、特に中央の影響力の及びにくい地方の貴族などが研究させて作られてきた魔法で、火や雷、風の元素を用いる。

白魔法を使う教会側から、黒魔法は悪魔の術であると言われたことから、根深い対立があった。

歴史の裏では、血で血を洗う抗争が繰り広げられてきた。

それを先代の王が、結局同じく元素を利用する魔法であり、合同で研究した方が合理的である、との指摘を受け、王の命で合同の研究施設を作るに至った。

もちろん完全に仲良くなったわけではなく、王の命令で表面上仲良くなっただけの話ではあるが。

そしてその施設も既に長い期間を経て、合同研究で新たな事実も分かり、この学校も多くの魔法使いを輩出するようになって来た。ナスカは、そんな学校の白魔術科でことんまで落ちこぼれている学生である。

「えっと、多分こっつばいな？」

「どこから」という明確な基準のない「西館二階の三番目の教室」と思われる教室を外から覗いてみる。

中では一人の女生徒が、辺りをきよろきよろしていた。

制服からして、黒魔法科の生徒だろう。

察するに、彼女の心はこんな感じなのだろうか。

（え？　だ、誰も来ないよ？　本当にここでいいのかな？　私、間違えた？　ど、どうしよう……）

少女の見た目は悪くない。

多少小柄だが、不安げな大きめの目が可愛く、穏やかそうな少女

で、とても火や雷を操って敵を攻撃しそうには思えない。

いや、それが出来ないから、この落ちこぼれの教室にいるわけではあるが。

ともかく、仲間がいる事で多少安心したナスカは教室に入る事にした。

「くらえ！ フライングえめるフラッシュファイナル！！！！」

実はナスカは変な事をして人を混乱させる事が多い生徒でもある。

「え？ きゃーーーーー！」

単に叫びながら教室に踏み込んでジャンプしただけだが、いきなりやられると大抵の人間は驚く。

ぱしゅん

ナスカの顔に水飛沫が当たる。

「……っ」

少女が咄嗟に出したのは、水魔法。

それには殺傷力はないが、押し黙る程度にはダメージを受けた。

「あ……ご、ごめんなさい！」

少女の慌てる声。

ナスカは多少ふらついたが、立ち直った。

目の前の少女は、申し訳なさそうにナスカを見ていた。

「ふむ、以後気をつけたまえよ」

ナスカは無意味に気取って見せた。

実際ナスカの無意味で唐突な行動が引き起こした事であり、少女にあまり非はないのだが。

「本当にごめんなさい」

だが、少女はとにかく謝った。

「まあ、それはそれとして」

ナスカはハンカチで顔を拭きながら言う。

「最終補習の教室はここでいいんだよね？」

「うん、多分いいと思うし、私も最終補習なんだけど……」

少女は何か言いたげにナスカを見つめる。

「……？」

女の子に、意味ありげな上目づかいで見つめられると、多少の事では動じないナスカも少し困惑してしまう。

ナスカは性格と成績こそ残念だが、顔は整っており、女生徒にはもてる方だ。

特に、生徒の9割が女生徒という白魔法科において、ナスカは「顔は格好いいけど、付き合うのは無理」「黙っていれば格好いいんだけどね」などと噂される注目の的なのだ。

だから、一部の将来聖職者になろうという少女たちの、限らない慈愛の瞳で見られたりする事には慣れているのだが、こういう視線には慣れていない。

「……なんだよ、俺の顔に目と鼻以外に何か付いているって言うのか？」

「えっと、口？」

「まあ、それは付いてるだけで飾りみたいなもんだ。使わないからな」

「はあ……」

多少茫然とした目に変化した少女。

「あの、そんなどうでもいい事より……」

案外的確にナスカを精神的に痛めつける少女。

「さ、さっきの事は、内緒にしておいて欲しいの」

うつむきながら、小さな声で言う少女。

「さっきの事って、脳内の誰かと楽しげに歓談していた事か」

「そんなことしてないよ!？」

「じゃあ、何だ」

「えっと、その……」

少女は再びうつむいて、辺りに人がいないかを確かめながら、小声で言う。

「水魔法を使った事……」

真っ赤な顔で、消え入りそうな声で少女が言う。

「ああ……」

ナス力は理解した。

魔法にはそれぞれ属性というものがあり、それを鍛えて行くものなのだ。

例えば、ナス力は水の魔法属性という事になっている。

それを使い続ける事で、その魔法の属性が深まり、より大きな魔法が使えるようになる。

だが、別の属性の魔法を使うと、それが弱くなる。

だから、この学園では他の属性を使う事を推奨していない。

特に、黒魔法科は白魔法属性、白魔法科は黒魔法属性を使う事を校則で禁止している。

それを破ると、謹慎・停学等の罰を受ける事もあるのだ。

「別にいいが、魚心あれば水心と言ってだな、分かるよな？」

ナス力はよく知らないが、最近読んだ物語で悪徳権力者が言っていた台詞を言ってみた。

ちなみにその物語は、懇願をたてに悪徳権力者が女に体の関係を迫るものだが、正義の魔法使いに退治されてしまう。

「よ、よく分からないけど、ハチミツ食べる？」

少女は自分のカバンの中からハチミツのビンを取り出す。

「いや、いらないうるか、なんでそんなもん持ち歩いているんだ」

「……好きだから」

「だろうけど……まあ、別に言う気はないけどな」

ナス力は、不正を先生に言いつけるような人間ではない。

「でも……」

だが、少女は不安げにナス力を見上げる。

「あー、じゃあ、こうだ」

ナス力は、周囲に誰もいないことを確認すると、右手の指を真上に差し出す。

すると、そこから炎が湧き出し、徐々に大きく噴き出した。

それは強い光を放つが、すぐに消えた。

「これでいいだろ？」

「……………？ あ、ハニートースト？」

「まず、ハチミツから離れろ」

ナス力は周囲を再度確認する。

「俺も黒魔法使ったから同じだって事だよ」

「ああ、うん、分かった……………ありがとう」

自分のミスのために、自らも校則を破って共有してくれたナス力への純粋な謝意。

ナス力は言葉通りを受け取るのが照れくさいが、茶化す雰囲気でもなかったので、話題を変えることにした。

「ところで、とっさに水魔法が出てくるような奴がどうして黒魔法科にいるんだよ。最初から白魔法科にいれば良かったんじゃないか？」

ナス力は単純な疑問を言ってみた。

魔法には属性があり、人はその属性を極めることで一つの魔法を身に付ける。

少女が水魔法が得意かどうかは不明だが、少なくとも好きな人間が、黒魔法科にいても、何の得にもならない。

黒魔法属性があればいいのだろうが、ここに在るという事はさっぱりなのだろう。

「……………」

少女は、言いくそくに目をそらした。

「あー、込み入った事情があるなら別に言わなくてもいいけどさ」

「言っても、笑わない……………」

「は？」

少女が真剣な表情で訊く。

そのあまりの真剣さに、ナス力は少しだけ怯む。

「い……や、笑うことは、ないと思うけど……」

「じゃあ、言うよ……あのね——」

少女が意を決して口を開く。

「入学申込書に、黒魔法と白魔法のどちらかに丸を付けるところがあつたでしょ？ あれを間違えて、黒魔法の方に丸つけちゃ……」

「わはははははは！」

「爆笑！？ 笑わないって言ったのに！」
半泣きの少女。

「いや、でもな……ぷっ……笑うなって……あはははは……無理だろ……」

「うわーん！」

少女がいよいよ本気泣きに移行しかけたので、ナス力は表情を戻す。

「あー、悪かった。もう笑わない」

「……本当？」

「ああ。よくあるよな。ちょっとしたミスで、丸つけるの間違えて……全く正反対の……学科に……はははははははは！」

「嘘つき！ うわーん！」

号泣が入った少女。

それはナス力が笑い飽きるまで続いた。

「で、あなたこそどうなのよ」

まだ若干の鼻声の少女が、懨然とした表情で言う。

「何がだよ」

「だから、あなたも火の魔法使ったでしょ。どうして白魔法科にいるの？」

「あー……」

ナスカは頭をかく。

「俺のは別に笑える話じゃないんだが……」

「大丈夫、絶対に笑ってあげるから！」

「いや、その宣言はどうだろう」

先ほどの仕返しに笑う気満々の少女。

そうであればある程言いくいだが、少女の話を聞いた上、大笑いしてしまった手前、言わないわけにもいかない。

「——俺もさ、確かにここに来るまでは火魔法が得意で、だからこの学園に来たんだ」

「あははははははは！ あつ、まだだった！」

「……真面目に聞けとはさすがに言わないが、ちよつと黙っててくれ」

ナスカの突っ込みにさすがに黙る少女。

「けどさ、俺の親父は聖職者じゃないけど、敬虔な信者で白魔法の実力者なんだよ。また古い考えの人でさ、黒魔法なんてものは絶対に許さないって、無理やり白魔法科に変えられたんだよ」

今までほとんど誰にも言っていない話を、何故か会ったばかりの少女に言う羽目になった状況に若干の違和感を感じながら、話を続ける。

「で、ある程度火属性が出来上がっていた俺には当然白魔法の属性に染まれるわけもないからさ、こうして一年がかりでここまで落ちこぼれたんだよ」

黙り込む少女。

最早笑う気すらないのだろう。

「どうだ、全然笑えない話だっただろ？」

「……ずるい」

「は？」

「そんな、ちゃんとした理由、ずるい！」

少女は、突然猛烈に怒りだした。

「いや、そんなことを怒られてもだな」

「もっと、入学申込書で丸つける時に誰かと肘が当たってずれたとかそんな理由じゃなきゃだ！」

「そんな奴いないだろ。いたら指さして笑ってやる」

「うわーっ、また笑われる！」

「お前かよ！」

ナスカもさすがに突っ込み疲れて来た。

元々ボケ属性の強いナスカには突っ込みは慣れないポジションなのだ。

「もういい。あー疲れた……そう言えば先生来ないな。本当にここでもいいのか？」

「だと思っけど、知らない」

「だろうな。……そう言えばさ、あー、名前知らないけど仮にゲルゲゲとしよう、なあゲルゲゲ」

「どうしてゲルゲゲ！？ 名前くらい聞いていいから！ 私はシェリンだよ」

少女は自分の胸を指して言う。

「まあ、じゃあそれでいい。ところでさ、黒魔法科の……」

「せっかく名乗ったんだから呼んでよ！」

「面倒くさい奴だなあ、シェリンは」

「そんな呼び方は駄目！」

ナスカはいちいち面倒になつてきたので、下手に出る事にした。

「分かったよ、シェリン。いい名前だな」

全くその気のない表情で言うナスカ。

「そ、そう？ ありがとう、えっと……ゲルゲゲ？」

「ナスカだ。それはいい。ちよつと黒魔法の教科書見せてくれないか？ 俺も白魔法の教科書見せるからさ」

ナスカは、カバンから自分の教科書を出してみせる。

「う、うん」

シェリンは多少戸惑いながらも、カバンから教科書を出してみる。
「じゃ、ちよつと見せてくれ」

ナスカがシェリンの教科書を手に取り開いてみる。

シェリンもしょうがなく、ナスカの教科書を開いた。

「へえ……」

シェリンがとりあえず選んでいる属性は火だった。

その教科書は、ある程度の火魔法を体得している人間にとって、とても分かりやすいものだった。

炎の増幅法、一点へのパワーの集中、空気の薄い場所での使用法など、火魔法の基礎が存分に書かれた分かりやすい教本となっていた。

そして、それはシェリンも同様のようだった。

ナスカが仮に選んだ水魔法が彼女にはとても理解しやすいものなのだろう。

二人は集中してそれを熟読した。

先ほどまでの騒ぎはなくなり、教室に静寂が訪れた。

どれだけの時間が流れただろう。

集中していた彼らには長時間という感覚がなかったが、しばらくしてから、先生が教室に現れた。

「おお、やっぱりこっちにいたのか。全然来ないからどうしたもんかと思ってたんだよ」

適当な教室名を書いた先生は、やはり別の教室にいたようだ。

「んー、まあもう遅いし、お前らも自分で勉強してたようだし、もう合格でいいんじゃないか？ どうせ簡単な小テストするだけだったからな。じゃ、お前らもう帰れよ」

言うだけ言って、先生は帰って行った。

「何なんだ」

せっかく集中して読んでいたのに水を差されたナスカは、少しだけ気分を害していた。

「まあ……帰れと言われたから、そろそろ帰るか」

「うんうん」

シェリンはそう言いながらも本から目を離さなかった。

「おい、ゲルゲゲ」

「うんうん」

「人に肘がぶつかって黒魔法科に行ったドジなシェリン」

「うんう……うわーん！」

やっと正気に戻った。

「あんたなんて！ たった今覚えたキュアーで回復してあげるんだから！」

「落ち着け、そしてありがとう」

なんだか少しだけ回復したナスカは、シェリンの肩を掴んで落ちつかせる。

「！ う、うん……」

ナスカの顔を間近で見たシェリンは、少しだけ頬を染めて目をそらす。

「ま、今日はもう帰ろう」

「で、でも、もうちょっとだけ読みたい！」

「奇遇だな、俺もだ」

ナスカはシェリンの手から教科書を奪い、カバンにしまう。

「ま、折角知り合っただんだから、また会おう。その時に教科書をまた見せ合えばいい」

「え、あ、うん……」

少しの戸惑いと、少しの嬉しさと、少しの希望。

そんな淡い感情とともに、シェリンはうなずいた。

「また、会いましょう」

黒魔法と白魔法の最低成績者の二人は、こうして邂逅することになった。

第二節

「そういうわけなので、決められるなら、次の休みまでに決めるように。それ以降はこちらで勝手に決めるからな」

困惑のざわめきが広がる教室。

だが、それも仕方がないだろう。

白魔法科二年生のークラス。

落第しかけたナスカもなんとかこのクラスに籍を置くことが出来た。

二年に上がったところで、特に変わらないつまらない授業が続くのかと思いきや、二年から合同演習というものがあるようだ。

これは、実際に学校外に出て、魔法の実地訓練をしてくるものなのだが、グループを組んで行う。

これがなかなか難しく、大抵の生徒は自分でグループを組むことができない。

なぜなら、条件が厳しいからだ。

- ・ おおよそ5人程度、4人から6人のグループを作る
- ・ グループ人員の属性は全員別でなければならない
- ・ 最低一人は白魔法科および黒魔法科双方の人間がいなければならない

一見簡単なようだが、白魔法科と黒魔法科の間にはなんとなく溝があり、普段の接点はない。

元々の知り合いがいるならともかく、大抵は相手の科に友達はいない。

そこには根深い問題があり、なかなか難しいのだ。

元々の対立の歴史なんて、今の学生には関係のないはずではある。だが、やはり歴史は歴史である。

先生の世代、先生の先生の世代の対立が、この世代へと遺伝してしまっていることも往々にある。

そもそも魔法使いというものは多くが自分の魔法自分の属性が一番だと思っているところがある。

その上、方向性が異なる魔法を使うとなると、もう理解できない人種となるのだ。

ナスカのように、黒魔法の属性を持つのに白魔法科にいるような人間は、白魔法科の人間も黒魔法科の人間も大して変わらないことを知っているが、大抵の人間はそうではないのだ。

交流がないことによつて、「嫌われているかも？」と思い込んでいる生徒が多く、それ故に「だったら、こちらで親しく出る必要はないよね」と勝手に思うことも多いのだ。

だが、実際には多くの属性があり、それらが相互協力することで大きなパフォーマンスを発揮することが出来る。

それは口で言っても理解がなかなか難しい、だからこそその合同演習なのだ。

チームを自分たちで決められる生徒はほとんどいない。

だから、ほぼ全員先生が決めたチームで演習を行うことになる。

そうなると、相手の科はもちろん、同じ科の友達と同じチームになれないため、困りどころでもあるのだ。

「うーん、まあでも、別に誰とでもいいしなあ」

ナスカは基本的に人見知りしないため、誰とでもうまくやっていけるので、チーム構成はどうでもよかつたりもする。

「どうでもよくありませんわ」

そんなナスカのつぶやきに答える者がいた。

透き通るような白い肌と長く雑じり気のない金髪。

折れそうな細い身体。

見た目も流れる血も、生粋のお嬢様。

「何でだよ、エメリィ」

「……まずは、そろそろその呼び方をやめていただけませんか？

私には枢機卿様からいただいた、エメルフィーという名前があるのです」

「長い上に格好悪い」

ナス力はあっさり言う。

「枢機卿全否定！？……私の名前ですし、かりそめにも尊重していただけませんか？」

「いやでも、エメリイの方が可愛いからいいんじゃないか？」

ナス力が言う、特に深い考えのない言葉に、彼がエメリイと呼ぶ少女は一瞬で真っ赤になる。

元々の肌が白いだけにその辺かは一層分かりやすい。

「……ナ、ナス力様がそうおっしゃるのなら仕方ありませんね」

エメリイは顔を隠すためにナス力に背を向ける。

「で、何がどうでもよくないんだ？」

「……？ 何のことですか？」

「いや、さっきどうでもよくない、とか言って現れたじゃないか」

「あ、ああ、そうでしたわね」

エメリイが軽く息を吐く。

「先生にお任せすると、私とナス力様が一緒のチームにならなくなるかも知れませんか。裏から先生に手を回す方法もありますが、ナス力様はお怒りになりますでしょ？」

「んー、まあ、そうだろうな」

ナス力は軽く返事をする。

ナス力は基本的にいつも軽い性格ではあるが、一度エメリイに切れたことがある。

それは彼女が、金の力で教師を動かそうとした時だ。

ナス力は怒った上で、二度と話しかけるな、と言った。

その時はエメリイが泣いて反省して謝ったことで仲は戻ったのだが、それ以降、それまでちよっとお高く止まっていた感のある彼女が少し接しやすくなった。

更に、それまでも入学前からの知り合いで仲はよかったのだが、

その事件以降、いつもナス力についてくるようになった。

簡単に言えば、これまでわがままが通ってきたお嬢様が叱られて、ナス力が気になる存在になったのだ。

「チームが違ってしまったえば、ナス力様のお世話が出来なくなりますわ」

エメリイが困った様子で言う。

「いや、別に世話なんて要らないぞ。まあ、どうしても困ったら、白魔法科の子は優しいから同じチームになった子が助けてくれるだろうし」

「演習は黒魔法科の方も一緒ですよ！ あの人たちは白魔法の悪いところを見つけては大声で笑うのですわよ！」

「いや……まあ、そういう奴もいるかもしれないけどさ」

見てきたかのように言うエメリイに、呆れ気味に言うナス力。

「それに私はナス力様のお父様に、ナス力様をよろしくと頼まれたのです。その責務を全うできなくなりますわよ」

「いや、だから、それは親父の社交辞令みたいなもんだって」

エメリイの父は、上位の貴族であり、また敬虔な信者でもある。

同様に信者であり、また白魔法使いとして名のあるナス力の父と親交が深い。

そして、ナス力の父はナス力を無理やり白魔法科に入れたことからやけにならないかと心配し、エメリイに頼んだところはある。

エメリイは純粋なお嬢様であることもあり、頼まれたことには責任を持つてしまうのだ。

「どうしてもって言うなら、チーム作ればいいけど、知り合いいるのか？」

「黒魔法科になんか、知り合いなんていませんわ」

平然と言うエメリイに、知り合いいないのにどうして見て来たかのような黒魔法科の悪口が言えるんだよ、と突っ込みたくなったが、言っても意味がないので言わなかった。

「ナス力様はお知り合い、いらっしやらないんですの？」

「あー、んー、いないことはないけどなあ……」

ナスカはシェリンの顔を思い浮かべる。

「あいつはどうなんだろなあ……」

「お知り合いがいらっしゃいますのね。確かに黒魔法科は殿方も白魔法科よりも多いと聞きますし」

「いや、女だけだな」

ナスカがいうと、エメリイが傍目でも分かるほどに驚く。

「ナ、ナスカ様？ その方はどういう関係の方ですか？ 親しいんですか？ か、可愛い方ですか？」

「どうしたエメリイ、とりあえず落ち着け」

「……は、はい。申し訳ありません……」

エメリイは大きな深呼吸をした。

「そ、それで、その方はどなたですか？」

「んー、シェリンっていう、この前の最終補習で会った子なんだけど」

「最終補習……ということは、黒魔法科最下位の方ですね」

エメリイは少しだけほっとする。

そんな人間なら自分が太刀打ちできる、と思ったのだろう。

「そんな方は私たちのチームには相応しくありませんわ。せめて足を引く張らない方でないと」

「いや、俺も最下位なんだがな……」

「ナスカ様は私と一心同体です！ だからいいんですの！」

「そんなものになった覚えはないが……ま、知っててちょっと話をしたっただけだから、向こうもいきなりチームを組もうと言われても困ると思うな」

「そうですか……」

エメリイが複雑な顔をする。

黒魔法科の知り合いがいるならチームが組める。しかし、ナスカの知り合いで女生徒というところがあまり気に入らない。だから、これで良かったのか悪かったのか分からない。

「ま、チームを作りたいって言うなら、また考えよう。他に何かできるかもしれない」

ナスカが立ちあがる。

「今日は帰ろう。校門まで送る」

「はい、ありがとうございます」

エメリイは少しだけ嬉しそうにそう言って、自席に荷物を取りに行く。

カードウ魔法学園は基本的に全寮制である。

殺傷力の高い事もある魔法使いを、不安定な育成中の状態で外に出せない、演習や夜間講習など夜間に及ぶ授業も多いことからの規則なのだが、あくまで原則だ。

貴族の子等はほとんど寮に入っていないし、特殊な種族の生徒は寮での集団生活を嫌い、やはり寮には入っていない。

エメリイはまさにその貴族の令嬢であり、毎日送り迎え付きで家に帰っている。

「お待たせいたしました」

帰る用意を持って、戻って来るエメリイ。

「じゃ、行くか」

「はいっ」

二人は教室を出る。

廊下は下校する生徒、話しこんでいる生徒が沢山いて賑やかだ。

「あ、ナスカくん、エメルフィーさん、さよなら」

「おう、明日」

「ごきげんよう」

挨拶を交わしながら歩く廊下。

階段を下り、出入り口に向かう二人。

そこは、色々な学年や科の生徒が入り混じる空間。喧騒も大きい相知り合いも少ない。

「あ、いた！」

そんな中、聞いたことのある元気な声が響く。

一瞬だけの静寂と、視線の集中。

振り返るナスカが見たのは、こちらを指さす少女。

「シェリン？　もしかして俺に用か？」

「うん、そう！　えっと……ゲレゲレ？」

「……お前はどの科にいても落ちこぼれたと思うぞ？」

「そんなことないっ！　ど忘れしただけ！　えっと……なんだった？」

思い出そうと試みたものの結局思い出せないシェリン。

「俺は麗しのダンディだ」

「そう！　麗しのダン……あれ？　違う気がする！」

「よく気付いたな、結構頭がいいぞ」

「そ、そうかな……えへへ……」

褒めてもいないのに照れるシェリン。

「ナスカ様、こちらのユニークなお方はお知り合いですか？」

「あ、そうそう、ナスカ！」

エメリイの問いに、シェリンが割り込む。

「あー、まあ、知り合いのシェリンっていう劣等生だ」

「ひどい！」

「で、こっちはエメリイだ」

「ごきげんよう」

「あ、こんにちは」

挨拶を交わす二人。

だが、ナスカはエメリイが少し不機嫌になっている事が分かっている。

彼女は黒魔法科を良く思っていないからだ、とナスカは思った。

実際は、見知らぬ少女がナスカと仲がいい事を気に入らないのだが。

「あー、とりあえず二人とも悪い奴じゃないから……」

「そんなことより！」

これからエメリイを説得しようとしていたナスカの言葉を遮り、

シェリンが言う。

「ねえねえ、合同演習でチーム組まない？」

「へ？ ああ……」

「こっちでね、友達三人とチーム作ったんだけど、白魔法科の人が必要だったから、入ってくれると嬉しいな。あ、エメリイさんも一緒に」

一方的に話すシェリン。

エメリイは少し呆気にとられている。

「んー、まあ別にいいぞ。こっちもチーム探してたし」

「ナスカ様！？」

「？ 駄目か？ さつき探してるって言ってたから」

「いえ……駄目ではありませんが……」

エメリイが複雑な表情を見せる。

「？ いいんだよな？」

「……ええ、構いませんわ……」

「ほんと！？ じゃ、他の子呼んで来るね」

そう言うのと、シェリンは走り去って行った。

「……ナスカ様、あの方とはどういうご関係ですか？」

エメリイが少し不安げに訊く。

「言っただろ、最終補習の時に会ったんだよ」

「……それだけにしては、とても仲がよろしくありません？」

「そうか？ まあ、話しやすい奴ではあるな」

ナスカはシェリンの去った方向を見つめながら言う。

エメリイは、何か言おうとしたが、シェリンが戻って来るのが見えただけ、言わなかった。

「呼んで来たよ！」

嬉しそうに戻って来るシェリン。

彼女が連れて来たのは黒魔法科の制服を来た二人の女生徒だった。

一人は黒い髪を左右で束ねた少女。

気の強そうな顔で、じっとこちらを睨んでいる。

もう一人は肩にかからない程度の髪に知的な瞳、そして非常に小柄な身長少女。

「あのね、こっちの人がエメリイさん、でこっちが……えっと、ゲルマン？」

「お前はなにか、俺を忘れる呪いでもかけられてるのか？」

「違うよ！ 覚えにくい名前なの！」

「いや、絶対違うと思う」

こんなやり取りの中でも、ちょっとしたピリピリ感が漂っている。

「ま、こっちの紹介はこっちでやるから、そっちの紹介してくれ」

「う、うん……あのね、この子がアールヴァンテ。アールって呼んでるの。雷属性なの」

シェリンは黒髪の少女を紹介する。

アールと呼ばれた少女は、挨拶もせず、ふん、とそっぽを向いた。

「で、でね、この子が……」

「ボクはトイネルヴィ。長いからトイネって呼んでね。風の属性を専攻してるんだ。よろしくね」

シェリンが紹介する前に、小柄な少女は自ら名乗った。

「あ、あのね、トイネは成績は黒魔法科一番なのよ」

シェリンが負けずに紹介する。

「じゃあ、そっちも紹介してよ」

「ん、ああ、こっちが……たしかエメルフィーだったっけ。長いからエメリイって呼んでる。光属性の魔法を使う」

「よろしくお願いしますわ」

ナスカの紹介に、エメリイが頭を下げる。

「あ！ あの技の人？」

突然シェリンがエメリイに尋ねる。

「？ 何の事ですか？」

「あの、えーっと、確かフライングえめるフラッシュファイナル」

「……それはおそらく、ナスカ様が私の名前で遊んだだけですわ。私はそんな技なんて持ってません」

そう言いながら、エメリイはナス力を睨む。

「ま、そんな事はともかく。俺がナス力。まあ、一応水属性って事になってる。シェリンとは最終補習で会った」

ナス力は適当に自分の紹介を終えた。

「で、この五人でチームって事で――」

「ちよつと待ちなさいよ」

突然割って入ったのは、先ほどからずっと黙っていた、黒髪のアール。

「あんた、最終補習受けるような成績最下位の役立たずなんですよ。なんでこんなのとチームを組まなきゃならないのよ」

アールはナス力を指さして言う。

「あー、まあ言いたい事は分かる……」

「聞き捨てなりませんわね！」

ナス力がやんわり受け流そうとしたところ、エメリイが受けて立ってしまった。

「ナス力様を悪く言う事は許しませんよ」

「いや、さっきお前、シェリンの事全く同じように言ってたじゃ……」

「ナス力様は黙っていてくださいますし！」

「……………」

いつも淑やかなエメリイの大声に、ナス力は黙ってしまう。

「そもそも白魔法なんて金持ちが道楽でやってる役立たずなのに。回復魔法が使えるからまあ、足手まといでも我慢してあげてもいいのに、それが使えないなら必要ないのよ」

アールは見た目通り気の強い少女で、やはり白魔法を嫌っていた。だが、そう言われて黙っているエメリイではない。

「白魔法は教会で研究されてきた由緒正しいものですわ。黒魔法こそ田舎貴族の道楽にお恵みいただいて生きながらえて来たのではありませんの？」

「何よ！」

「何ですの！」

エメリイとアールが一触即発の状態に対峙している。

こんなところで魔法でも使われたら停学や退学にすらなりかねない。

しょうがないので、ナスカは仲裁に入る事にした。

「まあまあ、ここはワシの顔に免じて引いてはくださらんか」

「何者よあんた！」

「ナスカ様はお黙りくださいまし！」

矛先がナスカに変わったただけだった。

第三節

この国は、騎士で有名な国であり、昔から騎士団入りを希望する少年は多かった。

だから、この学園に来て魔法を学ぼうとする学生は、その残り、つまり女子学生のほうが多くなる傾向にあった。

ただ、近年では魔法が高度化し、それを学ぼうとする男子学生も増え、また、女性騎士も増える傾向にあり、男女比は平準化されつつあった。

だが、彼らの世代になって、とある事情で急激に騎士団を志願する少年が増え、魔法を学ぼうとする学生が激減してしまったのである。

現在、この学園は男子生徒よりも女子生徒が圧倒的に多い。

だから、チームを組めば、男子一人女子四人という構成は普通にあることでもある。

だが、そんな一般論は今のナスカには関係なかった。

「えー……とりあえず落ち着いていただき誠にありがとうございました」

ナスカは深々と礼を試みる。

往來の喧嘩で騒ぎになりそうだったので、必死で近くの教室に連れ込み、座らせて、やっと冷静になったところだ。

ナスカは女同士の喧嘩の仲裁なんてやった事もないが、シェリンはおろおろするだけであり、トイネは静観しているだけなので、彼が動かなければならなかった。

「まあ、色々あるとは思いますが、チームになるわけですし、みんなで仲良く……」

「嫌よ」

限りなくへりくだって話していたナスカの話をあっさり断ったのはアール。

「あんたは駄目だし、あの女も嫌い。あんたたちとチームを組む気はないわ」

「何ですって!?!」

「あーもう、落ち着けて!」

ちよつとつつき方を間違えるとすぐに再燃してしまう。

さすがに楽天的なナスカも頭が痛くなってきた。

もうしばらく放置して、好きに喧嘩させて疲れるのを待とうか、と投げやりに思い始めた。

「ねえねえ、あのね」

そんなナスカにこつそりと話しかけて来るのは、隣に座っていたシェリン。

「アールを悪く思わないでね。あの子悪い子じゃないの」

「うーん、あそこまで攻撃的だと、さすがに難しいなあ。でもそれはエメリイも同じか……」

ナスカは喧嘩を続ける二人を眺めながら答える。

「で、でもね、成績の悪い私をかばってくれるし、助けてくれるし、色々教えてくれるの。本当は優しい子なんだよ!」

「へえ」

ナスカは少しだけアールを見直す。

要するにエメリイと同じなんだろう。

お互いに役に立たない人間をサポートしていて、だからチームを組みたくて、そのチームは役に立たない人間がいるから、それ以外の人間を最高にしたいのだろう。

そうなると話が少し見えて来た。

後は、黙っている小さな少女がどういうスタンスか、だろうか。

「ところで――」

ナスカが少し大きめの声を出すと、喧嘩していた二人も振り返る。

「トイネ、だったつけ? お前はどっ思ってるんだ?」

「え? ボク? 何が?」

いきなり話を振られて驚くトイネ。

「いや、チームの構成とか白魔法と黒魔法とかの話」

「うーん、チーム構成はやってみないと分からないよね。学校の授業だけじゃ分からないから演習があるんだし。一年生の成績が悪いから演習が出来ないとも限らないし逆もそうだし」

トイネがあっさりと二人の喧嘩の原因を否定したので、二人は反論も出来なくなった。

「白魔法と黒魔法は、分けてることそれ自体馬鹿馬鹿しいと思うてるよ。同じように元素を使う魔法だからね。単にそれを研究して来た団体と歴史が違っただけで、今も分かれてるっていうのも変な話だよ。」

逆にお互いの歴史を研究すれば新たな事実が出てくるかもしれないのに。

今活躍してる魔法使いたちが完全に分かれていて、結局その弟子たちが研究施設にいて、だから反目しあうんだよね。

外の世界の分断が、研究施設の派閥を生んで、それがこの学園の科を生んで、お互いの科が疎遠になってしまうのも変だよね。

こういう構造は内部からじゃ変えられない。

でも、外の魔法使いの世界はもっとひどいから、外部からも難しい。

かと言って権力のある王様は魔法の事情に疎いからなかなか難しいんだよね」

「……うん」

ナスカはとりあえずそう返事した。

他のみんなも同じ気持ちだろう。

喧嘩をしていた二人も、そんな気すらなくなって呆気に取られている。

「トイネの言いたい事は分かった」

とりあえず、白魔法と黒魔法の反目を馬鹿馬鹿しいと思っている事は分かった。

だったら、説得すべきは喧嘩している二人だけだ。

「俺も、白魔法と黒魔法は同じ原理だし大して変わらないと思ってる、シェリンは違いが分かるか？」

「え？ え？ 違い？ 何か違うの？」

シェリンはナスカが思った通りの反応をする。

「うん。まあ、違いを考えると、そんなにないと思う。でも、いきなりそれを納得して考えを変えろ、と言っても難しいだろう。トイネも言ったけど、大の大人たちからそれが出来ないんだからな」

ナスカは少し息を大きめの呼吸をする。

ここからが重要なところだ。

「でも、とりあえずは嫌な奴、役に立たない奴でいいから、一緒にやってみるのは大事だと思う。実際やってみてもやっぱりそう思うなら、その考えを変える必要がない。でも、それでやっぱりそうでないとなったら、考えを変えればいいと思うんだ」

ナスカが慎重に言葉を選んで言うと、教室は一瞬しん、と静まる。

「で、ですがナスカ様……」

「エメリイ、お前はいつもは穏やかで優しい奴だろ？ ちょっと喧嘩売られただけで、そんなに取り乱したりしなくてもいいんじゃないか？」

「……申し訳ありません」

エメリイは、しゅん、とうな垂れる。

「俺の事を馬鹿にされたのが取り乱した原因だし、お前が優しいのは十分わかってるし、これまでも助けてくれた事をありがたいと思ってる。だから、これは俺のワガママだけど、いつも優しいお前でいて欲しいんだ」

ナスカが言葉を選びながら言うと、エメリイは顔を上げ、徐々に顔が赤くなっただかと思うと、再び下を向いた。

「はい……分かりましたわ……」

エメリイは消え入りそうな声で言った。

「さて、アール」

「な、何よ」

ナスカがアールに振ると、アールは少しだけ身構える。

彼女はトイネの言葉で戦意を失っており、また、喧嘩相手のエメリイが大人しくなってしまったことから、今更喧嘩をする気もないが、かと言っていきなり勢いを失うのも何となくできずに、自分でも困っている。

「多分、だけど、お前がチームを組む目的って、シェリンなんじゃないのか？」

「え？ そうなの！？」

理解もしていなかった当事者が驚く。

アールは一瞬困った顔をして、シェリンを見、ナスカを見て開き直る。

「そうよ。それがどうしたのよ」

アールはそっぽを向きながら答える。

「やっぱりそうなんだな。シェリンをサポートするためにチームを自分で作りたい。そうになると、シェリン以外に足を引っ張りそうな俺は駄目、黒魔法を馬鹿にするような事を言うエメリイもシェリンと一緒にさせたくない。シェリンの失敗を馬鹿にするかもしれないからな」

「……………」

アールは何も言わない。

それは肯定を意味するものなのだろう。

「お互い不満のあるメンバーってのもあると思う。けど、お互いチームを作りたいって目的は共通だと思う。多分、他にチームを組めるメンバーをお互い知らないんじゃないかな？」

誰も何も言わない。

その事は十分過ぎるほど分かってるからだ。

「とりあえず、その利害のためだけでも手を組まないか？ 喧嘩でチームの足を引っ張らなかつたら、喧嘩したっていいし、文句言っただっていい。うまく行くかどうかとか、そんな事はやってみないと分からないし、それでも先生にチームを組んでもらうより遥かにマ

シだと思うんだ」

ナスカはゆつくりと、それぞれの目を見ながら説得する。
静寂。

戸惑い。

ナスカが少し不安に思った頃。

「ボクはいいよ。ナスカくんって面白そうだしね」

トイネがにつこり笑って言う。

「わ、私も！ チーム組みたい！」

シェリンがそれに続く。

「……ナスカ様がそうおっしゃるのなら……」

エメリイも賛成してくれる。

これで四人がチームを組む事に賛成した。

残りの一人も賛成せざるを得ない状況だろう。

「分かったわよ！ シェリンがいつて言うならいいわよ。でも、言いたい事は言うわよ！ いいわね！」

少し怒ったように言うアール。

「ああ、それがチームってもんだらう」

ナスカが言うと、アールはやはり不機嫌そうにしていたが、それ以上何も言わなかった。

「じゃ、これで決まりだね」

「ああ。じゃ、今日はもう終わりにして、明日にでもチームの提出をしよう。昼休みは空いてるか？」

「うん、空いてるよね？」

シェリンが二人に確認し、二人が肯定する。

「じゃ、明日の昼に話し合って提出しよう。とりあえず食堂で」

「分かった。あ！ じゃあさ、一緒にご飯食べよ？ チームなんだし！」

シェリンがいきなり提案する。

チームを組むことをそれぞれが了承したとはいえ、微妙な空気が漂っている中、シェリンの空気の読めない提案は、均衡を崩す恐れ

すらあった。

「俺はいいけど……どうかな？」

ナスカはエメリイをちらりと見る。

「……ナスカ様がいいのなら構いませんわ」

少しだけ嫌そうな顔をしているが、肯定自体はした。

「あと、そっちのアールも……」

「いいわよ、好きにすれば？」

「トイネもいい？　じゃあ、明日はみんなでご飯を食べましょう！」
シェリンは一人無邪気にそう言った。

ナスカは、今日の喧嘩の続きがないように祈るばかりだった。

「今日は、本当に申し訳ありませんでしたわ……」

背後からの声に、ナスカは振り返る。

チーム結成から数分後、黒魔法科の彼女らと別れて、ナスカは最初の目的通り、エメリイを送りに校門に向かっている。

「？　何がだ？」

「先ほどは取り乱してしまい、喧嘩をしてしまいましたし、ナスカ様にも失礼なことを言ってしまった……」

「ああ、まあ、確かにちよつと困ったけどな」

ナスカが言うと、エメリイは申し訳なさそうにうつむく。

「でも、うぬぼれるなよ。あの程度、俺がお前を普段困らせているレベルの足元にも及ばない。もっと精進するんだ」

「は、はあ……え？　あ、いえ、これ以上困らせるわけには……」

「いいんじゃないのか？　女つてのは、少し男を困らせた方が魅力的らしいぞ？」

ナスカが言う。

深い考えのない、軽い言葉だったが、エメリイはそれを重く受け止めた。

「……ナスカ様は、困らせる女性の方が好きなのですか？」

「困るのはやだなあ、面倒くさいし」

「ですか——ですよね」

「でもまあ——」

ナスカはやはり深い意味もなく、軽い気持ちで言う。

「エメリイなら、仕方がないよな」

「……………！？」

エメリイはやはり、それを必要以上に受け止める。

「エメリイにはずいぶん世話になってるし、かなり困らせてと思うからなあ。多少困らされても仕方がない」

「いえっ、あのっ、わたくしはナスカ様をお世話する立場として…

…」

顔を真っ赤にしてうろたえるエメリイ。

「それに、今回も俺の事を馬鹿にされたから怒ったんだしな。本当にエメリイには頭が上がらないな」

「……当然のことを、したまですわ」

エメリイはこれ以上なくうつむいて赤面を隠し、つぶやくような小さな声で言う。

「ま、そんなわけだから気にするな。怒ったエメリイも可愛かったしな」

「……………」

エメリイは更に顔を真っ赤にするとはいきや、大きなため息をついた。

「そう言えば、ナスカ様はそういう方でしたわね……」

「？　どんな奴だ、俺？」

ナスカは不思議そうに聞く。

エメリイは、もう一度大きなため息をつく。

大抵の人間は思春期を過ぎると、異性に気を使うようになる。

不用意な発言をしたりしないように言葉を選んだり、変な意味に取られないように考えながら話すようになり、結果慣れるまではぎ

こちなくなるものだ。

だが、ナスカにはそのようなものはない。

不用意な発言も誤解されそうな発言も平気でして、だから変な事も沢山言うが、どう聞いても愛を囁いているとしか思えない事も平気で言う。

白魔法科ではそれでしょっちゅう女生徒を赤面させている。

普段言っている事が変な事ばかりであるため、そのギャップから本当に恋をしてしまいそうになる女生徒も多少いない事もない。

だから、エメリイはナスカが思っている以上に困らされている。

「何でもありませんわ。ナスカ様は、優しく、格好よろしくて、背も高くて、大好きですっ！」

「な、何だよいきなり？」

「いつもの仕返しですわ」

そういうとエメリイは足早に校門を抜けて行く。

その向こうには執事と思しき男性が待っていた。

ナスカはその様子を半ば茫然と見つめていた。

「何だっただんだ……」

つぶやきながらナスカは校門を背にした。

「あ、あの……」

校内に戻ろうとしていた彼に呼びかける声。

「シェリンか。迷ったのか？ 寮はこっちじゃないぞ？」

「違うよっ。寮はそんなに迷わないもん」

「少しは迷うのか。まあいい、どうしたんだ？ あの二人はどうした？」

「あの二人はもう寮に戻ったと思うよ……あのね……」

シェリンは、うつむいてもじもじし始めた。

「トイレなら俺に言わなくても行けばいいぞ？」

「違うっ！ さっきいっぱい出した！」

「そんな報告はいらん。用件を言え」

「だ、だからね、お願いなんだけど、言わないでってこと」

「お前がトイレでどれだけ出したかなんて、いちいち言うわけがないだろう」

「違うのっ！ それは言ってもいいの！」

「それは女子としてどうだろう」

「あ、あのね……私が、本当は白魔法科に行きたかった事、言わないで」

シエリンに懇願される。

彼女にお願いされるのは、これで三回目だ。

「ま、あのアールって奴は白魔法嫌いっぽいしな。そんな事がばれたら、さすがに縁を切られる事はないだろうけど、多少ぎこちなくなるだろうしな」

「う、うん……」

「ま、言わないし言うつもりもない……いや、ハチミツはいらない」
「え？ いいの？」

シエリンは出しかけたハチミツをしまう。

「俺だってもうチームメイトだからな。団結が崩れるような事はしない」

「うん、ありがとう」

シエリンはにっこり笑う。

「じゃ、寮に帰るか」

「あつ、ちよつとだけ教科書見せてよ。二年生の！」

「あー、じゃ、一旦どこかの教室に行くか」

「うんっ！」

元気よく答えるシエリン。

夕暮近い校舎。

二人の影がその大きな影へと消えて行く。

第四節

カードウ魔法学園の学食は非常に広く、充実している。

それはこの学園が基本的には全寮制であり、全生徒が利用する事を前提としているからだ。

メニューも豊富だが、ほとんどの生徒が定食を注文している。

女子生徒に人気のアンオーズ定食と、男子生徒に人気のジン定食だ。

現王妃と現王の名を冠した定食は、安さの割に質量ともに十分という人気定食なのだ。

「あ、こっちこっち！」

ナスカはそのジン定食をトレーに乗せ、シェリン達を探していたが、彼女が大声で呼びかけたのですぐに分かった。

そこには既に黒魔法科の三人が座っている。

「あそこか、いい場所じゃないか」

「そうですね……」

エメリイは答えながら、少しだけ不安な表情だ。

彼女は普段は淑やかで優しい少女なのだが、どうにも昨日のように、喧嘩をして我を忘れてしまう事もある。

出来ればそんなところを見せたくはない。

だから、その原因となりそうな人には会いたくはない。

だが、ナスカが乗り気であり、またチーム結成自体には彼女自身のメリットもあり、反対する気もない。

先行して歩くナスカについて行くだけだ。

「よう、いい場所だな」

「でしょ、あのね、授業が終わった瞬間にダッシュして来たんだよシェリンが嬉しそうに話す。

「それは学生の姿勢としてどうかと思うが、よくやったぞ」

「えへへへ」

嬉しそうな彼女の隣に、ナスカが座る。

その隣にエメリイが座る。

位置として、シェリン、ナスカ、エメリイの順だ。

そして、シェリンの対面にアール、ナスカの対面にトイネが座っている。

シェリンとアールがアンオーズ定食、トイネがサンドイッチを自分の前に並べている。

ちなみにエメリイは家から持ってきた弁当だ。

もちろんただの弁当とはわけが違うのだが。

「じゃ、いただきますーす」

シェリンが早速食べ始める。

他の人間もそれに続き食べ始める。

ナスカも食べ始めたが、ふと顔を上げて目の前を見る。

「トイネはそれで足りるのか？」

ナスカは、小さなサンドイッチ二枚をもしやもしや食べているトイネを見る。

「うん、これで十分だよ」

「ちゃんと食べないと大きくなれないぞ」

「むう。分かってるけど、食べられないんだもん」

トイネが少しだけむくれながら言う。

「ま、女の子は背が低くても可愛いって言われるだけだからいいけどな」

「へえ、じゃ、ナスカくんはボクの事、可愛いと思うんだ？」

「努力を怠るな！ もっと努力して小さくなるんだ！」

「さっき大きくなれないぞ、とか言ってた人の言う事じゃないよね」
トイネが笑う。

「まあ、せめてミルクでも飲むんだ。やるよ」

ナスカは自分のトレーからミルクのコップを差し出す。

「ナスカくん、昼からミルク飲んでるんだ」

「まあな、ミルクを注文すると『ママのおっぱいしゃぶってな』と

「言われて、『俺、母さんいないんだ』とか言い返して微妙な空気になるのを毎日期待してな」

「うーん、何からつつこもうかなあ……」

「あーもう！ 学食にそんなこと言う人がいるか！ 微妙な空気作ってどうするのよ！ そんなことのためにわざわざミルク注文するな！」

それまでナス力を相手にせず黙っていたアールがこらえきれずに突っ込んだ。

「素晴らしい。さすがは俺の見込んだ奴だ」

「あんたに見込まれた覚えなんてないわよ」

「じゃあ、今見込んだ」

「何よそれ」

ナス力は、トイネの前にミルクを置く。

トイネは少し躊躇しながらも、それに手を付ける。

「白魔法科の奴は上品なお嬢様が多くてな。こういう事を言ってもただ微笑むだけだったり、困った顔をしたり、苦笑いしたりするんだよな。だから打っても響かないというか」

ナス力が言うと、エメリイが少し申し訳なさそうな顔をする。

ナス力は何の気なしに、一番強硬そうなアールと話すきつかけとして言ったのだが、まさに上品なお嬢様であるエメリイは、自分が責められているように感じたのだ。

「何よ、黒魔法科が下品だって言いたいのか？」

「悪い方に取るなよ。ボケる人間からすれば、突っ込まれるのは嬉しい事なんだぞ」

「私はあんたのボケを突っ込むために生きてるんじゃないわよ」

「そんな事はわかってるさ。それじゃ夫婦だからな」

ナス力の軽い一言に、周囲の空気が変わったが彼自身は全く気付かなかった。

「ただ、楽しい演習が出来るなって言いたかったただけだ。同じ演習なら、楽しい方がいいだろ？」

「うんうんっ、楽しい方がいいね」

「そうだね。ボクも楽しいのは好きだね」

「ナス力様がお好きなら……」

ナス力の言葉に、アール以外の三人が答える。

「……楽しいのがいいのは私もだけど、私が突っ込みを楽しがってやっていると合わないでよね」

「ま、それでいいさ。で、せっかく集まったんだからさ、昨日よりも少し戦力的な自己紹介でもしてみようか。お互い何ができるかって、必要だと思うんだ」

ナス力は全員に、語りかけるように言う。

「ま、そうだね。全員誰が何を出来るかが分かっていたら、いざという時困らないよね」

トイネがそれを受ける。

「じゃ、言いだした俺からでいいかな。俺は水の属性って昨日も言ったが、正直魔法は何もできない。シャレにならないほど出来ない。ただ、魔法以外の科目には自信がある」

「魔法は出来ないのにそれ以外は自信あるの？ 何よそれ」

「ナス力様は本当に成績は優秀ですわ、魔法以外。社会も、経済も、政治も、兵法も、ほとんど満点に近いですわ」

「……騎士団にでも行けばよかったんじゃない？」

アールが呆れたように言う。

「まあそう言われても仕方がないが、色々と事情があっただんな。とりあえず俺はこんなところだ。じゃ、エメリイ行くか？」

「あ、はい……」

エメリイは少し姿勢をただし、少し息を吸ってから話し始めた。

「私の属性は光です。闇の力に囚われたアンデッド系の者たちを闇から解放する事が出来ます。他には光を強めて熱を発したりする事も出来ますし、呪いからの解放、あと闇を照らす事も出来ますわ」

「あと、予言も出来るんだっけ？」

「予言なんて出来るの！？」

シェリンの驚く声。

「い、いえ、出来ませんわ……。予言は何十年も修行を積んだ方たちのうち、ほんの一部の方がやっと少し信頼のおける予言が出来る、という程度のもので、私も一応その訓練はしておりますが、予言が出来ると言えるほどではありませんわ……」

エメリイが少し恥ずかしげに答える。

「ふうん……」

アールが役に立たないわねえ、と言いたげだったが、さすがに今日は大喧嘩をしたくはないのだろう、それ以上言わなかった。

だから、エメリイも少し力チンと来たのだろうが、何も言わなかった。

「……後はヒーリングが、肉体的、精神的なものは出来ますわ。毒抜きも出来なくはないですが、こちらは水魔法が本流ですから、それほどでは」

「つまり、猛毒にかかるのと誰も助けられないってことね」

アールがナスカの方をちらりと見ながら言う。

「……なんですか？」

「事実でしょ？」

「まあ、落ち着けって」

慌てて仲裁に入るナスカ。

喧嘩は本意ではない二人はそれ以上は黙った。

アールは誰も猛毒を解消することは出来ない、と言ったが、実はそうでもない。

シェリンはナスカの教科書で勉強をし、毒抜きくらいは簡単にできるようになったのだ。

それはシェリンが話すなど言っているからここで言う事はない。

そして、ナスカだけが火の魔法が使えるという話になると、必ずどこかで矛盾が生じるので、それも言う事はない。

「とにかく、私はそのくらいですわ」

エメリイはそう言うのと、多少憮然としたまま黙る。

「じゃあ、次は誰にする？ 順番で言えばトイネでいいの？」

ナスカが目の前にいるトイネに聞く。

「うん、いいよ」

トイネがにこにこ笑いながら答える。

「ボクは風の魔法だけど、風は使いようによつては何とでもなるから、出来る事を言つて行くのは大変かな。かまいたちのように切り裂く事も出来るし、空気のシールドを張る事も出来るし、クッションのように緩衝に使う事も出来るんだ」

「言つとくけど、ほとんどの風属性の生徒はそこまで器用に使いこなせないわよ。トイネだから何でも出来るのよ。確か空も飛べるのよね」

トイネの説明に、アールが補足する。

「へえ、空も飛べるのか。あんまりそういう奴見た事ないな。今度一度見せてくれよ」

「……………」

ナスカの言葉に、トイネが彼をじつと見つめる。

「……？」

「……見たいの？」

「ん？ ああ。まあ、無理にとは言わないが」

トイネの、少し怒ったような雰囲気、ナスカは言葉を濁す。

「飛ぶことは出来るんだけど、下から空気を巻き上げて飛び上がるんだ」

「ほうほう、そうなのか」

「この恰好で、そんな事をしたら、どうなるか分かるよね？」

トイネが自分の胸の辺りを指差す。

彼女の服装は普通の黒魔法科の女子制服だ。

当然スカートであり、下から風が吹いたらどうなるのかは考えるまでもない。

「……見たいの？」

トイネは、再度ナスカに訊いた。

そこには二つの意味がある事は、誰が聞いても分かる。

「見たいな」

だが、ナス力はあつさり答える。

そんな答えを想像もしていなかったトイネは、一瞬とまどう。

「自分の体を宙に浮かせるなんて、落下するリスクを考えると普通は怖くて出来たもんじゃない。それが出来るって事は相当自信があるってことだ。トイネの魔法を一度見てみたくなっただな」

「だから、ボクはスカートなんだってば」

からかいで言った事に、全く別の答えを返されて、少し当惑しながら答えるトイネ。

「それだけ自在に風を操れる奴が、自分のスカートの制御が出来ないわけないだろ？」

「……まあ、そうだけど」

トイネは少しむすつとした顔で答える。

彼女は、ナス力が慌てる所を十分に楽しんだ後、その種明かしをしようと思っていたのだ。

「ナス力くんって案外つまんないね」

トイネはむくれたまま、横を向く。

「そんな事ないよ、ナス力は面白いよ？ どこがって聞かれたら、分からないけど……えっと、生き様とか？」

シェリンが何一つ根拠が見いだせない言葉でナス力を擁護する。

「シェリン。俺はふざけた奴だけど、滑稽な生き様という意味ではお前には勝てないと思う」

「そ、そうかな……」

シェリンが何故か照れて嬉しそうな表情をする。

「ま、それはそうと、トイネの魔法は、直接攻撃はもとより、相手を吹き飛ばしたりする事も出来るよな。考えようによっては色々な作戦が立てられるかもしれない」

「そうだね。その時にならないと分からないけど、状況によって使い方を思いつくかもしれないね」

トイネが前を向いて答える。

「よし、じゃあ今後も精進するように」

「あんたこそね」

ナス力の必要以上に偉そうな態度にアールが突っ込む。

「じゃあ、次はアールだ。雷を落とすんだっけ。得意そうだな」

「……なんか引かかる言い方ね。私は雷属性。そのまんま雷を操る事が出来るわ。場合にもよるとは思うけど、一般的には最も強力な攻撃力を持つ属性ね。ただ……言いたくはないけど、欠点もあるわ」

アールは少しだけ迷ってから口をつぐむ。

彼女はまだ白魔法科の二人には気を許してはいない。

自ら欠点をさらけ出す事がためらわれたのだ。

「欠点って何だ？」

何となくそれを感じたナス力が促す。

「……………」

アールは渋々口を開く。

「……電気だから、通電するのよ」

「あー。そりゃそうか」

「大雨が降ったりしてたら、敵味方関係なく通電する事もあるわ。」

……もちろん技術があればある程度コントロール出来るけど、私はトイネほどのコントロールは出来ない」

アールはいつもとは違い、少し小さな声で、答える。

「でもまあ、逆に考えれば多くの敵を一撃で倒せるんだな」

「まあ、そうだけど、細心の注意を払わないと味方も攻撃してしまうし、それに音や光が目立つから、隠密には出来ないわよ」

「欠点なんて、どんな魔法にでもあるだろ？　そうでなきゃこんなにくさんの種類の魔法がそれぞれ使われるわけないんだから」

「……そうね」

アールはじつとナス力を見つめる。

ナス力が何を言いたいのか、概ね分かっているが、それでも聞き

たかったのだ。

「分かったのは雷属性は攻撃に特化していて、多数の敵にも攻撃で来て、音と光が格好いいって事だ。それだけでいいだろ？」

ナスカの言葉に、アールは「あんたが聞いて来たんじゃないの」と小声でつぶやいたが、それ以上は何も言わなかった。

「えーっと、最後はシェリンだが、そろそろ申請の準備もあるからいいや」

「どうして！？ 私もやる！ 私も意外と凄いの！」

シェリンが勢いよく立ちあがる。

「まあ、どうしてもって言うならやつてもいいけど、俺はそれを聞いて『それがどうした』としか言わないぞ？」

「う、うん。あのね、私は火の属性だけど、それは苦手なの。勉強も大体全部苦手でよく分からないの。でもね、料理は得意！」

「それがどうした」

「ひどい！」

宣言通りの事を言われて、それはそれで涙目になるシェリン。

「ま、シェリンがこの中でどう役に立つかはやってみないと分からない。意外と役に立つかもしれないしな」

ナスカはシェリンが水属性で、水の魔法をある程度使える事を知っている。

それはこの中でも大いに役に立つはずだと理解している。

問題はそれを他人に知らせずにどう使うか、だが。

それはそれとして、シェリンは役に立つ事を知っているぞ、と暗に伝えて安心させたかったのだ。

「う、うん。おなががすいた時にきつと役に立つよ！」

だが、シェリンは見当違いの理解をし、更に安心した。

「あ、あとハチミツが好き！」

「それがどうした」

「ひどい！」

シェリンは全く同じ返答に、全く同じように涙目になる。

「分かった分かった。また今度料理とハチミツを食わせてくれ」

「あ、今でもいいよ」

「いや、食後にハチミツは食べない主義だ……あと、そのデザートにハチミツはいかなものかと思う」

アンオーズ定食が女子生徒に人気の理由の一つに、デザートが付いている事がある。

今日はゼリーの中にフルーツが入っているもののようなのだ。

シェリンはそのデザートになみなみとハチミツを注いでいる。

「え？　おいしいよ？」

シェリンはそれをおいしそうに食べている。

ナスカは食べていないため、その味を知らないので、合うかどうかは分からない。

だが、同じものを食べたはずのアールが微妙な顔をしているところを見ると、普通の人間には合わない取り合わせなのだろう。

「……ま、趣味趣向は人それぞれいいとして」

ナスカはなるべくシェリンの方を見ないようにして、話を切り替える。

「この五人で組む、という事でこれからチームの提出に行くけど、それでいいよな？　本当のところ、それぞれの属性や実力を理解している先生に組んでもらった方がバランスのいいチームが出来ると思う」

ナスカは一呼吸置いて全員を見渡す。

まだデザートを食べているシェリン以外は既に食べ終わり、ナスカの話に耳を傾けている。

「このチームは必ずしもバランスがとれているわけじゃない。それでも、このチームで本当にいいのか？」

ナスカが訊くと、一瞬全員が黙る。

これは最終確認である。

既にこのチームでやる事は決まっている。

だが、今ならまだやり直せる。

「私はやると言った以上やるわよ」

最初に返事をしたのは、意外にもアールだった。

「チームだから、あんたたちだって助けるし、協力だってするわよ」

「ああ、ありがとう、アール」

「でも、だからと言ってあんたたちや黒魔法科を……」

「私もやるっ！」

アールの言葉を遮って、シェリンが叫ぶ。

「わ、私もですわ」

「ボクもいいよ」

エメリイもトイネも雪崩れるように返事をする。

「よし、じゃあ決まりだ。これからよろしく！」

ナスカの声と、それに呼応する声に、食堂の中の生徒たちが注目をした。

第一節

カードウ魔法学園の二学年以降に行われる演習は、その名の通り、実際のフィールドで、実際に社会に出て役立つような指令をこなす。それは例えば調査だったり、潜入だったりすることも多いが、やはり敵を倒して来い、というものが一番多い。

学生の時代からそのような体験をさせることは、非常に有効ではある。

だが、昨日まで机上や教室や専用の施設で魔法を勉強・練習してきただけの学生を、いきなり実践に放り込むことは、リスクも非常に高い。

学生達は攻撃の仕方でも有効な攻撃法も頭では知っているが、戦いを全く知らないのだ。

そのような学生にいきなり戦わせては、死傷してしまうことも往々にしてある。

昔の学園では演習で人が死ぬことも珍しくはなかった。

そのため、今では本当の実践の前に数回ほど仮想演習を行うことになっている。

これは研究所の魔法使い達が作った仮想フィールドに敵やトラップを配置し、実演をさせる演習で、このフィールド内で怪我をしたり、場合によっては死んだりしても、実際には傷一つ付かない、というものなのだ。

もちろん、フィールド内にいる時は実際と同じように痛みを感じるし、感覚もおおよそ変わりがない。

そのため、死の恐怖はそのまま体感できるのだ。

ここでの数回の演習で、一度も誰一人死んだり、大怪我を負わなければ、晴れて実際の演習に行くことが出来る。

ちなみにフィールド内は完全に安全である、という前提の下、教官は誰も監視はしない。

もちろんやろうと思えば、フィールド外から監視も出来る。

だが、フィールド内では場合によっては夜を明かしたりするほど長時間になることもあるのだ。

逐一監視するということは、生徒同士の会話だけでなく、トイレや水浴びを覗くということでもある。

そこまで生徒を管理して、何が得られるわけでもないし、教師もそんなに時間を持て余しているわけでもない。

何しろ安全なのだ。

とにかく、誰も死傷せずに、指令をこなすという結果さえ出せばいい。

そんな仮想フィールドの中、林間の細い道を歩く五人。

「何か変な感じだね」。仮想フィールドなんて思えないね」
初演習とは思えないほど暢気なシェリンの言葉。

「よし、じゃあ、とりあえず夜営だ。シェリン、料理の準備！」

「うん！ 頑張るよ！」

元気に答えるシェリン。

「ちょ、ちよつと待ってください。まだ演習が始まったばかりで朝方ですわよ」

「分かってるさ」

「……でしたら、何故ですか？」

「なんとなくだ」

「……まあ、分かってはいましたが」

エメリイのため息。

「ねえ、火を起したいんだけど！」

「あなたもお料理の準備はおやめくださいまし。それに火を起したのなら、あなた以外に最適な方はおられませんわ」

早速薪を集めていたシェリンにあきれエメリイ。

「ええっ、野営じゃないの？」

「夜営にしては朝早すぎるね」

「そうだぞシェリン。初演習だからって浮かれすぎだぞ」

「え？ あ、うん、ごめん……あれ？」

シェリンが首を傾げる。

「あんたこそ浮かれないでよ。ほらシェリン、こんな奴の言うことは聞いちゃ駄目よ」

アールが呆然としていたシェリンを起す。

「あつ、そうだ！ ナスカに騙されたんだ！ ひどい！」

「確かにひどいな。ほら、エメリイからも謝って」

「誠に申し訳ございま……って、どうして私が？」

「だって俺の保護者なんじゃないのか？」

「保護者ではありませんわよ！ ナスカ様の身を常に案じて、お守りする役目ですわ」

「ならば今こそその役目を果たす時だ。ほら、あの黒髪ツインテールがこつち睨んでる！ 怖いよう、エメリイ！」

ナスカは怯えたふりをしながら、エメリイにしがみつく。

「ちょ……ナ、ナスカ様……抱きつかないでくださいまし……あ、あの、アール様、ナスカ様が怖がるのであまり怖い目で見ないでくださいまし」

エメリイは混乱気味にそう言った。

もちろんナスカが本気ではないことも、アールが別に睨んでいないことも分かっているのだが、ナスカの突然の行動に思考が働かなくなっただ。

「……この目つきは生まれつきよ、悪かったわね。もし私の目が睨んでるように見えるなら、くだらないコントを見せられてるせいかもね」

「何ですって？」

「何よ、事実でしょ」

「うん、まあ事実だな」

「ナスカ様はもう少ししがみついていてくださいま……いえ、黙っててくださいまし！」

「……もう、いいわよ」

アールはため息とともに歩き出す。

「どうしたんだアールは、機嫌が悪そうだな」

「始まったのかな？」

「何がだよ？」

「私は今、最中だよ」

「だから何のだよ？」

「うーん、ボクには君たちにどう対応していいか分からないだけの
ように思えるけどね」

「そうか、それならいいんだが」

「うん、アールは悪い子じゃないよ。この前夜怖くて眠れなかった
時、一緒に寝てくれたよ」

シェリンが元気に言う。

「そうだったな。問題があるのはアールじゃなくお前だったな。い
い歳して何やってんだお前。もしかしてまだおねしょとかしてんの
か？」

「してないよ！ 治ったもん！ 去年」

「……そうか、よかったな」

ナスカはあまり突っ込まないようにした。

「さあ、じゃあ真剣に行くか！ えっと、確か指令はフェンリル退
治だったっけ？」

「はい、フェンリルは元々神狼でしたが、徐々に凶暴性を増して人
を襲うようになったと言います。肉食獣ですが、強さはオオカミの
比ではありません。大抵の魔法は通用しますが、とても打たれ強い
そうですね」

「うーん、オオカミの類なら夜行性かな。まあ、昼のうちに見つけ
れば簡単に倒せるかなな」

「そうだね、特に夜行性ではないようだけど、暗いところが好きだ
し、魔力を持ったオオカミだから、夜になると打たれ強さが増すみ
たいだね」

「そうか、じゃあ、昼の間に見つけよう」

「仕切らないでよ」

「何を！ 俺の作戦能力は人一倍凄いんだぞ」

「それは前に聞いたわ」

「よし、じゃあ、トイネ、お前は風を感じるんだ」

「感じてどうするの？」

「いや、フェンリルの気配とか何とか、そういうものを感じたりとかだな」

「そんな事は出来ないよ」

「ええい、じゃあ、アールは雷を、エメリイは光を感じるんだ！」

「……………」

ナスカの指示はアールどころかエメリイからもスルーされた。

「ねえ、私は？」

「ん？ シエリンはそこで反復横とび」

「うん！」

シエリンは嬉しそうに反復横とびを始める。

「ほら、シエリンはきちんとやってるのに、お前らときたら！」

「そんなこと言われましても困りますわ」

「あ…………。このフィールドって、攻撃しても怪我しないんだっけ。雷の一発くらいいいわよね？」

「…………私には、それを止める術はありませんわ…………」

「あるよ！ 止められるよ！？ 落ち着け、落ち着けてアール」
ナスカが後ずさる。

「あんたに魔法撃てば、すっきり出来るのよね。イライラするから思いっきり撃たせて」

「エメリイ！ 何とかしてくれ。今こそ守る時なんじゃないか？」

「申し訳ございません、ナスカ様。ナスカ様を思えばこそ、ここは一度痛い目にあった方がよろしいのかと…………」

「ト、トイネ！」

「うん、早く終わらせてね」

「ノオオオオオ！ シエリン！ 助けてくれ、あの怖いツインデー

ルが！」

ナスカは最後の手段であるシェリンに泣きついてみる。

「え？ な、な、な、わっ、きゃっ！」

反復横とびをしていたシェリンは、突然の呼びかけにバランスを崩して転倒する。

「きゃあああああああ！」

「シェリン！」

道の脇は急斜面、というよりもほぼ崖になっており、シェリンはそれを滑り落ちていった。

「シェリーントッ！」

アールが叫ぶ。

その位置からは木が生い茂っていて下は見えない。
呼びかけても返事もない。

「……まずいな」

「どうするのよ！ シェリンが！ シェリンが！」

興奮気味にナスカを責めるアール。

「落ち着け、最悪の事態でも、ここは仮想フィールドだ。シェリンは大丈夫だ」

「……分かってるわよ」

そう言いつつも、その言葉にかなり落ち着きを取り戻すアール。

「ただ、この件は俺が悪かった。俺が責任を取る」

「責任ってどうするのよ」

「俺が助けてくる。ここを動かないでくれ」

「ちょ……！ 待ちなさいよ！」

ナスカは、アールの言葉を無視して一人で走り出した。

「なるべく坂のなだらかなところを探すしかないな」

ナスカはあたりの地形を見回し、大体の見当をつけて、坂のなだらかそうな部分を探した。

元の位置からしばらく行っただとところに、小さな下りの道があった。
「ここなら何とかなるか」

ナスカはその道を下りる。

道と言ってもかなり急なため、急いで下りることは出来ない。
更に下に行くにつれ、木の生い茂りが増え、昼間なのに若干暗くなっている。

「おい、シェリン、いるか？」

谷底近くまで下り、薄暗い中でナスカはシェリンを探す。
遠くまでは見えない。

そんな中、焦らずに先ほどシェリンが滑り落ちた場所の下と思われる方向に向かう。

「シェリン、いたら返事するな！」

「あ、ナスカ……え？ 返事しちゃ駄目なの？ じゃ、じゃあ……しーん」

少し前の方からそんな声が聞こえる。

「あそこか」

ナスカが声のする方へと行くと、そこにシェリンが座り込んでいた。

「シェリン、無事か？」

「う、うん、ちょっと足打ったから立てないけど」

シェリンが足首を押さえながら言う。

「ちよつと触るぞ」

ナスカは、シェリンの足首を押さえる。

「痛たた……」

シェリンの顔がゆがむ。

「うん、骨は折れてないな。捻挫だと思う。自分で治せるか？」

「へ？ あ、私、水魔法使えるんだっ！ ……あ、でも、皮膚の怪我とか毒は出来るけど、骨とかはまだ出来ない……」

「そうか。まあ、とりあえずみんなのところに帰るか」

「う、うん。でも、立てるけど、坂を登るのはちよつとつらいかな」
「しょうがないな、ほら」

ナスカはシェリンに背を向けてしゃがむ。

「うん……」

「って、なんで足の裏っていうか靴の底を背中に乗せてるんだよ」

「え？ 踏んで欲しいんじゃないの？」

「何故そういう結論に至ったか聞くのも面倒だから無視するが、とりあえず背負って上まで登ってやるから乗れ」

「うん、分かった。ごめんね」

シェリンがナスカの背に体重を預ける。

「じゃ、行くぞ」

ナスカは立ち上がり、先程下りてきた坂を上る。

坂はかなり急で、上るのはかなりきつかった。

「大丈夫？ 重くない？」

「羽のように軽いな」

「え？」

「いや、エメリイが女の子を抱えて、重くないか聞かれたときにはそう答えるって言ってたからな」

ナスカは坂を上りながら答える。

「ま、でも全然重くないぞ」

「でも今日重い日だし……」

「そんな報告はいらん」

ナスカはそれでも坂の急さに息が上がってきた。

ナスカは騎士でも兵士でもなく、魔法使いなのだ。

「ね、ねえ、大丈夫？ 降りようか？」

「大丈夫だ、多分」

「多分は大丈夫じゃないよ？」

「シェリンの癖にまともなこと言うな」

「ひどい！ じゃ、じゃあ、休憩しましょ、休憩！ わ、私がしたいの！」

「分かった……じゃあ、休憩しよう」

上では残った三人が心配しているだろうが、多少待たせてしまうのは仕方がない。

ナスカは静かにシェリンを下ろす。

シェリンはひねった足のほうを気遣いながら、ゆっくりとナスカの隣に座る。

本来は聞こえるはずの木々の梢は、ナスカの荒い息遣いに消える。

「ごめんね、私のせいで」

シェリンが申し訳なさそうに言う。

「いや、シェリンのドジに迷惑をかけられたことがないと言ったら嘘になるが、今回は俺のせいだ」

「え？ う、うん……あれ？ ナスカはいつも一言多くて、素直に受け取れないよ」

「——まあ、すまないと思っているのは事実だ。仮想フィールドだから、終わったら何ともないだろうが、怪我をさせたり、打ち所が悪かったら死んだかもしれない。さすがに調子に乗りすぎた」

ナスカはいつになく、真面目な口調で言う。

「自分のせいで女の子に怪我させるなんて、帰ったらエメリイに説教されるな」

「……仲いいんだね、エメリイさんと」

「まあな。俺の保護者面するのはうつとおしいと思うけど、俺を色々な部分で守ってくれているのもあいつだからな」

ナスカはかなり息が落ち着いて来るにつれ、木々のざわめきが耳に蘇る。

「あのさ、ナスカはエメリイさんのこと……」

「しっ！ 何かいる！」

ナスカがシェリンを制し、辺りをうかがう。

それほど遠くない位置から、咆哮が聞こえてくる。

「——まずいな」

「なに？ どうしたの？」

シェリンが小声で聞く。

「分からないが、獣のうなり声が聞こえる。状況から考えると、多分フェンリルだ」

グルルルルルル……

明らかにこちらを認識しているであろう獣の警戒の唸り。

「ど、どうしよう、大声上げればみんな来るかな？」

「そんなに離れてないから、叫べば聞こえると思うが、そうすると襲ってきそうだ」

薄暗い闇の中からこちらを警戒しながら近づいて来る獣。

それは紛れもなくフェンリルだった。

助けは呼べない、動けないシェリンを背負って逃げることは難しい。

そうなるともう、ナスカの炎魔法で何とかするしかない。

だが、使ってしまったえば、火は全てを焦がすので、炎魔法を使った形跡は残ってしまう。

それを上の連中にどういいわけすればいいだろうか。

ウオオオオオオオオン！

「きゃあ！」

シェリンがしがみつく。

恐怖で震えるシェリンを背にしながら、ナスカは立ち上がり、フェンリルと対峙する。

「ああああ、もうどうにでもなれ！」

ナスカは炎魔法を発動する。

シェリンの教科書を見て理論だけは知っている魔法だ。

自分の部屋で軽くなら使ったことがある。

火に方向性を持たせて、勢いで相手にぶつける魔法。

火は一箇所に止まると、酸素供給が追いつかず、ある程度の炎で安定するが、勢いをつけることで移動先の酸素を供給させ、勢いを増す、と教科書には書いてあった。

だが、部屋で試したところ、速くすればするほど、炎が空気で冷やされ、火は小さくなっていった。

「だが、最大の炎なら大丈夫だ！ 多分」

「た、多分は大丈夫じゃないよ！？」

「それでも、大丈夫だ！」

ナスカは大きな火の塊を集結して小さくさせる。

中心はかなりの高温になるだろうが、酸素不足の状態になるので長くは持たないだろう。

「行くぞフェンリル！」

それに勢いをつけて、フェンリルに飛ばす。

その塊は高速でフェンリルに向かい、そしてどんどん大きくなった。

ドゴオオオオオオオオ

炎の塊は、爆発的な勢いでフェンリルにぶつかる。

その勢いはナスカの想像以上だった。

「きゃあ！」

ナスカの足元に座っているシェリンがナスカの足にしがみつく。光で何も見えない状態が一秒。

晴れていく視界に映るのは、紅く焼けた山肌。

そして、焼け焦げたフェンリル。

フェンリルは身動きをしない。

「やったのかな……」

ナスカはようやくほっとして座り込む。

シェリンが呆然と焼け焦げたフェンリルを見つめている。

思った以上の効果。

ナスカはこれに嬉しさよりも戸惑いのほうが今は大きかった。

「これ……俺がやったのか……」

フェンリルの周囲だけでなく、大きくなった炎の塊が、途中から

山肌を焦がしていた。

今になってやっと、紅い残り火は消えたものの、焦げ臭い空気が辺りに充満していた。

「大丈夫ですか、ナスカ様！」

「シェリン、大丈夫？」

程なくして、上で音を聞いていたであろう三人が、慌てて駆けつけてくる。

「！これは……」

アールがこの惨状を見て呆然とする。

彼女だけではない、エメリイも、トイネですら、目を見張って焼け焦げた山肌とフェンリルを見つめている。

「あー……」

もはや誤魔化しはきかない。

この状況で自分達がやってない、と言い逃れることは不可能だろう。

三人の目も、一体何が起きたのか、という説明を待っていた。

「……凄いぞシェリン」

「へ？」

「こんな技が使えたんだなシェリン！ 使えないとか言って悪かった！ お前は凄い火の魔法使いだ！」

「え？ え？ ええええええ！？」

戸惑うシェリン。

「いやあ、凄かったぞ、シェリンは。咄嗟になるとあんなことが出来るんだな！」

「……シェリンがやったの？」

「え？ あ、う、うん、そうみたい……」

シェリンは戸惑いながらも、そう答えた。

「凄いじゃない、シェリン、一人でフェンリル倒すなんて！」

「う、うん、強かったよ？ 多分は大丈夫だったよ」

喜ぶアールと、戸惑いながらそれに合わせるシェリン。

それを見ながらほつとするナスカと彼を氣遣うエメリイ。
これで何とか課題終了というところだ。

第二節

「あれで行こう」

ナスカが言くと、シェリンがきょとん、とした顔をした。
放課後の教室。

いつものように、ナスカとシェリンが二人きりで教科書を交換していた時の話だ。

「うん、分かった」

シェリンも力強くうなづく。

「あれはいいやり方だと思うんだ、お互いにメリットあるしな」

「うんうん、ホットケーキはやっぱりハチミツだよね！」

二人の意見が思いつきり割れた。

「お前は何の話をしているんだ」

「え？ これから何か食べに行く話じゃないの？」

「どうして今まで一度も一緒にどこか行ったことないのにそう思ったんだ」

「たまには行こうよ。学校のそばに美味しいカフェがあるんだよ！」

「うん、まあ行くのは一向に構わないが話をそらすな」

ナスカがホットケーキに傾きかけた話題を戻す。

「この前の演習でフェンリルを倒した時、俺が倒したんだがシェリンがやったことにしただろ？ あれって有効な手段だと思うんだよ」

「？ どういう事？」

シェリンが首を傾げる。

「だからさ、俺が魔法使いたいと思ったとき、俺が使うとあいつらに俺が火の魔法使うことがばれるし、お前もそうだろ？」

「うん、せっかく覚えた水の魔法、使うところがないね」

「だからさ、例えば俺が使うふりをしてお前が使うんだ。で、俺が水魔法を使ったことにしつつ、実はお前が使うんだよ」

「……分かりやすく言つと？」

「これ以上シンプルには言えん。まあいい、一度やってみようか」
ナスカが立ち上がる。

わけが分からないまま、シェリンも立ち上がる。
ナスカはシェリンの後ろに回り、後ろから右腕をつかむ。

「え？ な、何……？」

「ちよつとき、指を立てて『えい』とか適当な事言いながら右手振
つてみてくれ」

「う、うん……えいつ！」

シェリンが右腕を振ると、その指先辺りから、炎が飛び出し、ど
こかに当たる前に消えていった。

「……………」

「やりたいこと、分かったか？」

「わ、私……」

シェリンが戸惑いながらナスカを振り返る。

「火の魔法使っちゃった……！」

「……お前はすげえなあ」

ナスカは時間をかけてシェリンに説明をした。

「じゃあ、行くよ、キューアー！」

「だから、お前はものを言うなって！」

「う、うん……」

結構な時間を費やし、何とか不自然ながらも、ましな程度に使え
るようになってきた。

「じゃあ、もう時間だから最後な」

「分かった。……でも、これってこんなに密着しないと出来ないの
？」

シェリンは少し恥しそうに言う。

本当に魔法を使う側は、魔法を使っていると見せかける側のぴっ
たり後ろにくっつくか、真横にくっついていてる。

傍から見ていると、仲のいいカップルが、いちゃいちゃしながら

魔法を使っているようにしか見えない。

「そりや仕方がないな。離れたところから魔法を使ったらすぐにばれるだろ」

「う、うん、そうなんだけど……エメリイさんとか、怒らないかな？」

「エメリイが？ どうして？」

「……いいよ、分かったよ、頑張るよ」

「じゃあ行くぞ、それキューアー！」

ナスカの声が、誰もいない教室に響いた。

ナスカは久々に、学外のカフェにいた。

彼が学外に出ることはあまりない。

大抵のことは学校と寮で事足りるからだ。

だが、シェリンなど女学生は、寮に住んでいても頻繁に外に出る。それは彼女らにとって普通でもあるし、一般的なのだろう。

ナスカは友達も多いほうだが、あまり遊びに行くことはない。

それは放課後にはエメリイを送るというワンステップがあるため、他の生徒は誘いにくく、更にエメリイが無言のガードをしているため、何となく割り込みにくいのだ。

更にナスカは外にあまり興味もないため、必然的に外出しなくなるのだ。

「で、このメニューのお勧めは何だ？」

「えっとね、ホットケーキのハチミツ増量生クリームのと、オレシジューズハチミツ入り」

「言い間違えたな。人間向けのお勧めは何だ」

「人間向けのお勧めだよ！」

「シェリンとは多分違う種族なんだと思う」

「一緒だよ、多分！」

「まあいい、ホットミルクでも注文しようか……何だこれ、オプシヨンつきって書いてあるぞ」

「え？ 本当だ、そんな注文したことがないけど……あ、この前他のお客さんが何か注文してて、『ママのおっぱいしゃぶってな』とか言われてた！」

「なにに！ それは注文しなきゃならないな！ マイドリームのために！」

「そんなドリーム捨てればいいと思うけど、好きにすればいいよ」
そんな会話をしていると、ウエイトレスが二人の席に来た。

「いらっしやいませ、ご注文は？」

ちよつときつめの目をした女性で、大人の色気を漂わせている。

「えっと、私はホットケーキのハチミ……」

「俺、ホットミルク！」

わくわくが止まらないナスカは、子供のような期待に満ちた目で、注文をする。

「……ホットミルク？」

ウエイトレスは、少し馬鹿にしたようにそう言う。

期待のまなざしでウエイトレスを見るナスカ。

早く終わらないかな、という表情のシェリン。

ちらり、とシェリンを見るウエイトレス。

「——恋人のおっぱいでもしゃぶってな」

そう言うつと、ウエイトレスは去って行った。

「恋人？」

「ええ？ ええええ！ 私！？」

一瞬で真っ赤になるシェリン。

「……まあ、そう見えても仕方がないな」

ナスカも少しだけ目をそらす。

「あ、あの、ごめん……！ まだ出ないから……出るようになったらあげるからごめんね！」

胸を押さえながら半泣きのシェリン。

「いや、言葉通りに取るな、余計に恥ずかしい」
その後、もう一度注文を取りに来てもらった。

「そういえばトイネって普段からあんな感じなのか？」
ナスカがトイネの事を聞いてみる。

あの中で一番の要注意人物といえばトイネだろう。
この前も感づいたような素振りがあつた。

「うん、大体落ち着いてて、ニコニコしてて、でも何でも分かつて、色々教えてくれるよ」

「ほう。トイネの魔法って、まだ見たことないけど、やっぱり凄いのか？」

「うん、結構大きな風を起せるよ！ 風の流れを変える事も出来るみたい。でもね、体力がないからずっと魔法を使つてるとすぐ疲れちゃうみたい」

「体力ないのか。まあ、仕方がないな。あの背格好であの食生活だしな」

トイネは基本的に子供のように小さい。
太つてもいないし筋肉もないので、それこそ本当の意味で羽のよ
うに軽い少女だろう。

魔法はそれほど体力を使うわけではないが、それでもある程度の
スタミナが必要であるし、集中力もいる。

人は集中すれば体力を消費するので、当然スタミナも消費する。
それが彼女にはないのだ。

「そこがあいつの欠点といえば欠点なのか……」

「そうなのかな？ あと、この学校にお兄さんがいて、お兄さんに
ずっと魔法を習っていたから、あのレベルになったと言つてたかな」
「へえ、つてことは黒魔法科の風属性なのか？」

「違つとか言つてたよ。よくは知らないけど……」

「風魔法以外の人間が教えてどうにかなるものなのか？」

「知らないよ、トイネがそう言つてただけだから。でも今でも二人

とも寮に入ってるけど、よく会って話をしてるらしいよ」

「俺は兄弟いないからよく知らないが、俺らの年代ってあまり兄弟で会ったりしないんじゃないのか？ 特に男女となると」

「う、うん……私もお兄さんいるけど、会ったりしないね。でも嫌いじゃないよ、学校にいるから会えないだけで」

「まあ、シェリンやトイネが普通に当てはまるかというところでもないからな」

「私は普通だよ？」

「はっはっはっ、面白い冗談だ」

「ひどい！」

半泣きになったシェリンは、やけ食いのようにホットケーキを食べ始めた。

ナス力はゆっくりとホットミルクを飲み干した。

この学園に、寮は四つある。

元々仲の悪い白魔法使いと黒魔法使いが合同で作った施設ではあるが、それぞれの子弟のために、威信をかけてそれぞれが豪華な寮を建築したからだ。

これが白魔法科と黒魔法科の更なる分断の火種にはなっているのだが。

同じ男子生徒でも、科が違えば寮が違う。

つまるところ、仲がよくなる一つの機会を失っているのだ。

これが、両陣営の威信をかけているため、非常に豪華で広い。

白魔法科の男子などはそもそも生徒数が少ない上、貴族が多く、寮に入らない生徒も多いが、黒魔法科に匹敵するような広さとなっている。

それを開けておくのももったいないので、白魔法科や黒魔法科以外の生徒は基本こちら側に入寮している。

基本的にこの学校は白魔法使いと黒魔法使いが合同で作った研究施設の一つであるが、その研究結果により、新しい魔法が生み出される事もある。

それらの魔法を学術にフィードバックし、生徒に教えるのがそういう少数学科なのだ。

だが、基本的にそのような学科はークラスの人数も少ないのが現状で、だからこそ、それでも過剰な寮は十分人が収容できた。

ナス力はこの寮のロビーが好きだった。

無駄に広く豪華な上、ほとんど人がおらず、大きな空間でのんびり出きるからだ。

なんだか王侯にでもなったような気分になる。

「うむ、よきにはからえ」

誰ともなしにそう言うのがナス力の日課だった。

「ん？ 呼んだかい？」

だが、その日はたまたま他にも人がいた。

細いがすらりと背が高い男子生徒。

知性漂う目でナス力を見ている。

「いえ、いつもの事なのでほつといてください」

「そうか……君は白魔法科の生徒かい？」

「え？ まあ、ここにいてるって事はそうですけど」

「そうか。ふむ……もしかして君はナス力君かい？」

「へ？ まあ、そうですけど」

「そうか——」

その男子生徒は立ち上がる。

「残念ながら、僕はここにいてるが、白魔法科ではないんだ」

「ああ、そうですか、そういうえば別の学科の人もあるんでしたっけ」

「僕はミトルネルヴィ。ミトネと呼ばれている。精霊魔法科の二年だ」

「そうですか……あれ、ミトルネルヴィ……ミトネ……？」

ナス力は、その名前に妙に聞き覚えがあった。

「どこかで聞いたことがあります、覚えてません」

「多分、君はトイネルヴィと聞いたんじゃないのかい？」

「ああ、そうだったかも……あれ、もしかして、トイネの？」

「そう、僕はあの子の兄だ」

知的な微笑み。

確かに同じ血を引いていそうだ。

「ま、妹をよろしく頼むよ。あの子はいつも余裕があるように見えて、実はそんなに精神が強い子じゃないからね」

「はあ」

ナス力はトイネを思い起こし、確かにそんな面がありそうだな、と思った。

ミトネはじつとナス力を見つめる。

「……何ですか？」

「ふむ、君はとても火の精霊に愛されているな」

「！」

ナス力は警戒する。

彼が火の属性を使うことを知られたら、まずい。

今の会話を誰かに聞かれていないか、周囲を見回す。

「まあまあ、誰にも言ったりしないよ。ただ、僕らには見えるってことだけは覚えておいた方がいいよ」

「……はい、でも、どうして見えるんですか？」

「それは僕が、精霊魔法科の生徒だからさ」

「すみません、俺、精霊魔法科のことあまり知らないの」

「そうだね、知らない人もまだまだ多いから仕方がないね。時間があるなら簡単に説明するけどどうする？」

「それじゃ、お願いします」

ナス力は辺りに人がいないことを再度確認してそう言った。

精霊魔法、というといかにも特殊な魔法のように思えるが実はそうでもない。

古来からある白魔法や黒魔法、これらは全てそもそも精霊魔法な

のだ。

全く別に進化を遂げてきており、彼らはそれぞれ自分の属性の元素を操ることで魔法を使っている、と思っていた。

だが、それは誤りで、実際は自分の属性の精霊を操っていたのだ。魔法使いの言う属性とは、その魔法使いが、その精霊に好かれていたかなのだ。

それが最近の研究で分かってきたことだ。

ただ、分かったところでそもそも精霊は見えないので、何も変わらないように思える。

だが、そうでもないのだ。

逆に考えてみよう、では何故見えないはずの精霊が発見されたのか。

見える人間が存在するからだ。

魔法使いの中で、非常に少数の人間に限定されるが、精霊を見えたり感じたりする人間がいる。

今のところどう修行すればそうなるのかは分からず、大抵は先天的に見えていた者のみが見えるだけだ。

精霊魔法科はそのような先天的に見える者たちの集まりである。

精霊が見えるということが何のプラスのなるのか。

これは実はかなりの利点になる。

普通の魔法使いは、見えない精霊を何とかして動かしている。

新しい魔法を研究するのも、どうすればどうなるかという研究を繰り返してやっと見つけられるのだ。

まさに群盲が象を撫でる状態だったのだ。

だが、彼らはそれを一瞬で象であると判断し、また、見えるので、何をすれば全体としてどう動くかが理解できる。

つまり、一般の魔法使い達が百年かかる研究を、彼らなら数日で出来てしまうのだ。

そしてそれは、研究だけでなく、通常の魔法に対しても有効である。

精霊が見えるということとは、どうすればより効率的に魔法を使うのかを理解できるし、他人をも指導できる。

「つまり、トイネはミトネさんが指導したんですね？」

「そうだね、あの子は勉強はかなりできる子だったけど、魔法はかっつきし出来なかつたんだけど、僕が精霊を見ながら指導したら、あそこまで出来るようになった。ただ、その成果ちよつとアンバランスになつてしまつたかな」

「あいつはアンバランスなんですか」

「そうだね、総合的な風魔法使いとは言えないところはあるね。元々それほど風の精霊に好かれていないところを無理やり使つてるから」

「はあ、よく分かりませんが、そうなんですか」

ナスカはそもそもトイネの魔法を見たことがないので、それ以上は何も言えないが、彼女は優等生で通つてるので言うほどのアンバランスでもないんだろう、とも思った。

「——君は、とても火の精霊に愛されている。これは血筋かな？」

親御さんは高名な火の魔法使いなのではないかな？」

「いえ、俺の親父はガチガチの白魔法使い、水魔法の高名な使い手ですよ」

「ふむ、お母様は？」

「あー。俺、母親いないんですよ。親父に聞いても何も言わないから、死んだのか別れたのか分かりませんが」

「そうか、それは悪いことを聞いたね」

「いえ、最初からいないから悲しいとか寂しいとかそういうことはないんですよ。エメリイ——俺の友達もよく気を遣うんですが」

「そうか。ただ、精霊というのはなぜか血縁というものが大好きだ。君の血縁に火の魔法にとっても愛された人がいると思う。君が更に火に愛されたいなら、その人に会うのも一つの手だと思う」

「はあ、俺の知る限りは火の使い手はいませんが、探してみます」

「うん、じゃあ、僕はこれで失礼するよ」

ミトネは片手を上げながら、ナスカに背を向けた。

ナスカは彼がいなくなるまで見つめていた。

「うーん、あの人が人に言うとは思えないが、トイネにくらいは言うかな。いや、逆にあの人が来たのはトイネの差し金かも知れないな……」

ナスカは腕を組む。

「ま、トイネが悪い奴かと言えば、そんなことは全くないんだがな。いつそ打ち明けて味方にするか、知らないを通して誤魔化すか……だが、こっちにはシェリンという死ぬほどあっさりばらしそうな奴もいるし、さつさと仲間にしておいた方がいいかもな。ま、いいや、今日は寝よう。何とでもなるだろ」

そう言うと、ナスカは一つ伸びをして、自分の部屋に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3589ba/>

白い黒と黒い白

2012年1月13日20時45分発行